

## 優秀作品

### 「お母さんが乳がんになったとき」

吉田 賢人 (よしだ・けんと)

8歳／小学生／北海道

きょ年の春、お母さんがにゆうがんになりました。ぼくはお母さんがにゆうがんになっていると聞いて、びっくりしました。そして「もしお母さんがしんでしまったらどうしよう。」と思いきごく心ぱいになりました。

こうがんざいちりょうがはじまりました。ぼくが、学校から帰るとお母さんはとても苦しそうにして、はいていました。ぼくがせなかをさすってあげると、「ありがとう。」

と言って、うれしそうでした。

はじめてのこうがんざいちりょうのつぎの日は、ぼくの遠足の日でした。お母さんは、がんばっておべん当を作ってくれました。そのおべん当は、すごくおいしかったです。

こうがんざいちりょうは、全ぶで6回ありました。はき気のほかに、だるさやかみの毛がぬけるなどのしょうじょうがでました。

ぼくは、かみの毛がぬけてしまってがっかりしているお母さんを見てかわいそうだと思いました。

はき気やだるさは、一週間ぐらいつづきます。その時は、いつもは、おりよう理をしないお父さんが朝ごはんを作ってくれました。ばんごはんは、お父さんが買ってくるおべん当でした。色いろなおべん当を食べたけど、一番おいしいのは、お母さんが作ってくれるばんごはんです。早くよくなって毎日おりよう理ができるようになってほしいと思いました。

ちりょうが全ぶおわった時はすごくうれしそうでした。ぼくもすごくうれしかったです。

今はまだ、かつらをかぶっていますが、かみの毛が伸びて、かつらがとれたら、おんせんにいきたいそうです。ぼくもお父さんも楽しみにしています。

お母さんのにゆうがんは、早きはっ見だったそうです。お母さんが元気になってくれて本当によかったです。これからは、びょう気にならないでいつも元気でいてほしいと思います。